

-----  
[成果情報名] ソラマメ跡のうね・マルチを再利用したオクラの省力栽培

[要約] ソラマメ収穫跡のうね・マルチを再利用して、省力的にオクラを栽培できる。オクラは9cmポットに4本仕立てで育苗し、育苗ポットに被覆尿素のシグモイド120日タイプを1ポット当たり窒素成分で5g施用すると、ほとんど追肥なしで慣行の栽培法以上の収量が得られる。ソラマメの早出し栽培と組み合わせることにより10a当たり255万円の粗収益となる。

[キーワード] オクラ、マルチ再利用、ポット施肥、省力、水田高度利用

[担当部署] 筑後分場・野菜チーム

[連絡先] 0944-32-1029

[対象作目] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

-----

[背景・ねらい]

ソラマメは、収穫時以外は比較的管理作業が集中せず、水田を利用して取り組みやすい品目であり、早出し栽培が筑後南部地域で広がりつつある。さらに水田を高度利用して収益の向上を図るため、ソラマメ跡のうね・マルチを再利用したオクラの省力栽培技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1 .ソラマメ収穫跡の畦・マルチを再利用して、省力的にオクラを栽培することができる。この栽培法により、耕起、作畦、マルチング及び追肥作業の省力化が図られる(図1)。
- 2 . オクラは9cmポットに4本仕立てで育苗し、育苗培土中に本ばで必要な窒素量を緩効性肥料で施用することにより、収量が高位で安定して追肥が省略できる(図2)。
- 3 . 育苗ポットに施用する肥料は、被覆尿素のシグモイド 120日タイプが適し、施用量は1ポット当たり窒素成分で5gが適当であり、多すぎても少なすぎても収量が低下する(図2)。
- 4 . 10a当たり1800ポット植えで窒素施用量は県施肥基準の2分の1となり、その時の収量は2.9t、粗収益は155万円、総労働時間は910時間になる(図2、表1)。また、ソラマメ早出し栽培(粗収益100万円/10a)と合わせて10a当たり255万円の粗収益を得ることができる。
- 5 . この栽培法で品種間差はほとんどないが、「グリーンソード」は莢果が全体的に濃緑で、1果重が重く、草丈が低い特性がある(図3、一部データ略)。

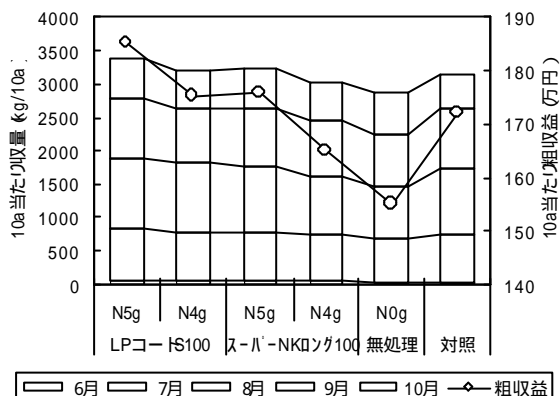
[成果の活用面・留意点]

- 1 . 露地で水田を高度に利用した比較的高収益な営農類型として活用できる。
- 2 . ソラマメの早出し栽培は、うね幅120cm、株間45cmの3本L字仕立てで収量が高位で安定する。そのため、オクラの栽植様式は、うね幅120cm、株間30cmの1条植えとし、通路確保のため2うね植えて1うね空けるとよい(栽植本数1800本/10a)。
- 3 . 労働力2人で栽培できる面積は、ソラマメが15a、オクラが10a程度である。

[ 具体的データ ]

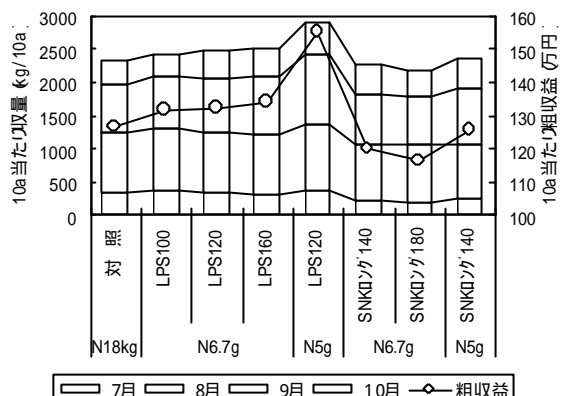


図1 ソラマメ後のうね・マルチを再利用したオクラ栽培の手順



2002年

- 注) 1. 品種は「ピークファイブ」。5月30日定植。  
 2. 対照は、休耕地に基肥CDUS555でN15kg施用。  
 3. 追肥は7～8月に追肥化成で行い、無処理区がN6kg、その他の区はN3kgを施用。  
 4. 粗収益は、2000～2003年の月別平均単価から算出。



2003年

- 注) 1. 品種は「ブルースカイZ」。5月29日定植。  
 2. 対照は、ソラマメ跡に基肥CDUS555でN10kg施用。  
 3. 追肥は、対照区が7～9月に追肥化成でN8kg、その他の区は8月に油かすでN4kgを施用。  
 4. 粗収益は、2000～2003年の月別平均単価から算出。

図2 緩効性肥料の種類及び育苗ポット施用量別の収量、粗収益

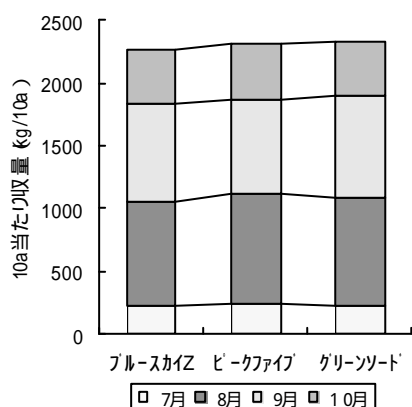


図3 オクラの品種と時期別収量

- 注) 施肥は、育苗ポットにスーパーNKロング140をN6.7g施用。

作業名	労働時間 (時間/10a)
育苗管理	27
定植	8
灌水・追肥	11
台風対策	4
病虫害防除	6
摘葉・収穫	510
調整	269
出荷	65
後片づけ	10
合計	910

- 注) 1. 育苗管理は、ポットの準備、土詰め、播種、間引き、灌水等を含む。  
 2. 台風対策は、倒伏防止のためのひも張り作業。

[ その他 ]

研究課題名：ソラマメの早出し栽培技術の確立と後作野菜の選定

予算区分：経常

研究期間：平成15年度(平成13～15年度)

研究担当者：水上宏二・小田原孝治